

に『労働新聞』を発刊し、荒畑寒村は山川均、近藤憲二とともに『青服』を出した。いずれも労働者の団結を説いた程度のものであったが、毎号印刷所を妨害され、発売頒布を禁止されて、官憲の圧迫は言語に絶するものがあった。あたかもそのとき大正七年の米騒動が勃発したので、弾圧はいっそう熾烈をきわめた。そして両紙ともその第四号が新聞紙法違反に問われ、和田、久板、および荒畑、山川は四カ月ないし十カ月の禁錮刑に処せられたのである。

この新聞紙法違反の判決文には「被告は、同盟罷工と題し、某造船所における同盟罷工の状況を記し、暗に同盟罷工を懲懲する趣旨を述べ」また「労働階級の使命と題し、資本家と労働者とは相敵手たるを以て、労働組合を組織し、資本を労働者の手に奪うべき趣旨の各安寧秩序を紊乱する記事を編集発行し」云々と述べている。このくらいのことでも秩序紊乱でひっかけられ、牢獄に値したのだ。当時の言論範囲の見本として掲げておく。

ロシア革命と米騒動

一九一七年（大正六）三月、ロシアに革命が勃発し、ロマノフ王朝が倒れてケレンスキー政府が来た。

この革命の性格につき、日本ではその詳細はまだよく知られていなかったのであるが、同年五月七日、東京在住の各派社会主義者が、山崎今朝弥方でメーデー集会を催した席上、高島素之、吉川守園、山川均から、ロシアの事変に対し日本社会主義者の決議をロシア社会党へ送る提議があり、直ちに決議文の討議を行った。同決議文は、劈頭まずロシア社会党の成功を祝し、ロシア革命の歴史的意

義を明らかにするとともに、これにたいするロシア社会党ならびに万国社会革命団体の責任を力説し、同時に戦争に対する責任とこれにたいする希望を表明したものであった。ロシア社会党にたいし「銃を逆さまにして戦え」と激励した決議文が朗読されると、拍手がおこり、室内は一種の緊張を示した。この決議文は直ちにロシアをはじめ各国社会革命団体に送られ、その機関紙にも掲載されて反響をよんだ。

当時、アメリカに亡命していたロシア革命党員が、母国の革命に参加するため帰国の途中、幾人かが売文社を訪ねたこともある。

そして同年十一月、レーニン、トロツキーのボルシェヴィキ革命がおきた。ロシア革命！労働者の天下！この大事実がこの地球のうえに、われわれの住むこの地球のうえに、しかもツァーの専制国家に成し遂げられたのだ。ロシア革命がその後どんな道をたどったかは別として、当時、この事実の前に、全世界の民衆はおどりがあつたのである。

日本の思想界にもそのどよめきは聞えてきた。労働階級は甚大なる感銘を与えられ、日々の新聞に現われるその通信電報は非常な興味をもつて読まれた。

しかしながら、好景気に酔った資本家と政府は、一種の不安を感じながらも、なお、それは外国のことで、日本のことではないという安心をもっていた。そこへ突然として、しかも当然に起ったのが、大正七年夏の米騒動であった。ロシアとドイツの革命をもつて、遠い外国の出来事とみていた資本家階級も、この足もとの事実で戦慄せざるを得なかったのである。

米騒動というのは、大正七年七月下旬、富山県下の漁民の女房たちが相談のうえ、町の米屋に米の

廉売を哀願したのにはじまり、この哀願運動は近隣の各地にも拡がった。(当時の米価の状態を記しておくと、大正六年の初めには、一石十六円三十幾銭、それが同年末には二十三円八十幾銭、七年七月下旬シベリア出兵決定は米の投機買占をその極に達せしめ、三十円を越えて取引所は立会停止となり、八月七日には小売値段一升五十銭にまで暴騰したのである。)しかし哀願運動ではウチがあかぬので、八月五日、富山県滑川の漁民の女房たちは、ついに米船三徳丸を襲って、米を掠奪する直接行動に出た。これが導火線となって米騒動は全国に波及するに至ったのである。

すなわち、愛知、兵庫、京都、大阪、徳島、東京、福岡など三府三十四県、全国百八十市町村にわたって勃発したのであるが、ことに神戸は最もはげしく、五万の群衆が外米買入指定商鈴木商店を打ちこわし、神戸新聞社、警察署などを襲撃した。警官一千名が出動したが役に立たず、軍隊の出動をみるに至った。その他、広島県三次町では電気会社を襲撃して町を暗黒化し、山口冲山炭鉱、福岡県下の十幾つの炭鉱にも猛烈な焼打ち、掠奪が行われた。全国で軍隊出動四十二カ所を数えたという。

この米騒動は、もとより、統一ある指導の下に行われたものではなく、一口にいえば自然発生的なものであり、思想的根拠があったのではないが、しかしその根底には漠然とではあるが無産階級の自覚があり、久しく屈伏させられた勤労大衆のブルジョア特権階級への憎悪と反感があり、民衆の怒りの爆発があった。

今まで労働階級の悲痛な叫びに耳をかさなかった資本家階級も、この米騒動の前に周章狼狽し、こぞって社会政策的施設のための寄付金を申し出で、数百万円がたちどころに集まった。政府も今さらしく急に社会政策を口にしはじめ、新たに社会局を設置したのもこれが動機であり、協調会が設立

されたのもそのためである。かくして資本家および政府者は彼等みずから、大衆の直接行動が最も有効なことを全民衆に知らしめたのであった。

かくてロシア革命と米騒動とはわが社会運動、労働運動を刺激し影響するところ甚だ大きく、労働運動史上に一時期を画するものであった。

国際労働会議

ロシア革命と米騒動とは、日本の労働運動、社会運動を刺激し、その勃興の機運をつくったものであり、大正七年(一九一八)後半から八年にかけて労働組合運動は、飛躍的發展をなし、労働組合は雨後の筍のごとく出来たのであったが、これらの組合を質的に整理するうえに一つの機会を与えたのは国際労働会議であった。国際労働会議というよりもむしろ、その代表選出をめぐる紛争といった方が適切であろう。

国際労働会議は、第一次世界大戦後、パリの平和会議で決定されたいわゆる国際労働条約にもとづいて毎年開かれるもので、政府、資本家、労働者の三代表によって構成され、その第一回会議は大正八年十一月、アメリカのワシントンで開かれることになっていたのである。要するに、国際労働会議とは、大戦後勃興した労働階級をなだめすかしつつ、資本主義の存続繁栄を期するもので、労働者はいわばそのダシに使われたのである。

しかしながら、この国際労働会議という華やかな舞台は、労働者を眩惑させ、なかには、その労働代表たらんがために実質のない看板だけの労働組合をつくって、しきりに奔走した労働ブローカーま

で出てきた。

政府は、日本の労働状態が国際的に曝露されることをおそれて、官選労働代表を決定し、随員として数名の労働ブローカーを選ばしめた。即ち、労働代表として榎本卯平、顧問には代表詮衡中忠実、御用をつとめた大阪鉄工組合の堂前孫三郎、随員に東京天野工場の大島義晴、東京砲兵工廠の五木田慶三郎、呉工廠の謙田友一であり、堂前は直ちに鉄工組合から、大島は友愛会からいずれも除名された。五木田はかつて新井京太とともに労働連合会を創めて、労資協調につとめ、砲兵工廠のストライキに際し御用をつとめたことがあるので、この機会に、工廠から行賞推薦されたのである。

もっとも、この榎本代表決定までには種々のいきさつがあり、最初、第一候補本多精一博士、第二候補高野岩三郎博士、第三候補榎本卯平であったが、本多は労組や世論の強い反対の空気を察して辞退し、高野は一応受諾したが、友愛会は彼がその評議員であった関係から痛し痒しのおかしな関係に追いこまれ、福田徳三、森戸辰男、櫛田民蔵らの近親関係にある人たちの尽力により辞退せしめ、鳥羽造船所の技師であった榎本に決定したのであった。

九月二十日には神田青年会館で友愛会、信友会主催の全国労働者大会がひらかれ、ついで十月五日には友愛会、信友会、大日本鉱山労働同盟会、新人労働同盟主催のもとに、芝公園より明治座にいたる大示威運動が行われ、同夜明治座で政府糾弾、榎本反対の殺気みなぎる大演説会が催された。

この演説会に、わが無政府主義団体東京労働運動同盟（北風会）は、岩佐作太郎、中村還一を弁士として送り、参加した。

なお榎本一行出発の日は、横浜埠頭は弔旗をもった労働者の大群によって埋められ、榎本はこっそ

り水上署のランチで乗船させられた始末であり、乗組員の大半は友愛会海員部員であったため、榎本反対の氣勢が強く、機関部は機関の火を落して数時間、船を立往生させたというようなこともあった。

この国際労働会議労働代表選出問題、及びこれにつづく反対運動は、これが機縁となって日本の労働運動に一転機を来さしめる形勢を導いた。

まず第一に、共通の問題にたいする各労働団体の提携であり、第二には、いわゆる学者や労働運動「指導者」の、少しも油断ならぬものであるという労働者の自覚、そして第三には、政府は労働運動を妨害こそすれ、少しも頼むに足りぬという、労働者自身の自覚であった。

この国際労働会議にたいする友愛会の態度は、国際労働会議そのものを否認するのではなく、その労働代表の選出方法に反対したのであった。このことは、後に会長鈴木文治が労働代表として出席したこともあり、そのときは米津満亮、西尾末広が、各々顧問または随員としてついていっている。

これにたいし無政府主義団体「北風会」および印刷工組合「信友会」は、国際労働会議を国際的労資協調機関であるとしてこれを否認し、反対したのである。

普通選挙にたいする態度方針とともに、この国際労働会議にたいする労働組合の態度は、労働運動における二つの流れを示すものであった。

無政府主義団体「北風会」

前回「無政府主義団体「北風会」の名が出たが、この北風会については、ぜひ書いておかねばならぬ。大正四年（一九一五）から小石川指ヶ谷町（のち本郷白山上に移り、さらに小石川指ヶ谷町へ移

転)の渡辺政太郎方で開かれていた「研究会」が、すなわち北風会の前身であるが、この集まりは渡辺の慈父のごとき温情と実行的熱意により漸次発展し、久板卯之助の『労働青年』の読者であった中村還一、山路信、また印刷工で古くからの同志原田新太郎によって、印刷工組合信友会の水沼辰夫、高田公三らも来り、いよいよ力を加えつつあった。ところが大正七年五月、渡辺が乾酪性肺炎のため死んだ。

渡辺政太郎は山梨県に生まれ、小学校を卒えて理髪職の徒弟となり、のち横須賀で理髪店を開いたが失敗し、洗濯屋、紡績工場、新聞配達などに放浪すること数年、岐阜の濃尾育児院に雇われ、友人とともに静岡県で富士育児院を経営したこともある。社会主義運動に投じてからは『社会新聞』つづいて『東京社会新聞』に關係し、キリスト教社会主義派に属したが、幸徳事件後は無政府主義に傾き、極度の貧苦と戦いつつ、徹頭徹尾、その死にいたるまで、主義の宣伝、同志の世話と養成につきし、その影響はまことに大きかった。

彼の告別式には、在京の各派社会主義者のことごとくが集まり、小石川指ヶ谷町から三河島火葬場まで棺をかつぎ、革命歌をうたつて、一種の示威運動のような形になったのであったが、幸徳事件以後まったく忘れられていた革命歌「ああ革命は近づけり」(築比地伸助作)はこのときから復活し、流行したのであった。

「研究会」は渡辺の死後も同所でつづけられたが、無政府主義者の集まりには、もう一つ上野桜木町の「労働問題座談会」があった。これは「サンジカリズム研究会」「平民講演」の後身ともいえるべきもので、大杉栄、和田久太郎らが中心であり、この二つの集まりの参加者の大半が同じであった関

係から、両者が合併して「北風会」となった。渡辺政太郎の号「北風」をとって命名したのである。

この「北風会」は大正八年九月「東京労働運動同盟会」と改めたが、会員自身もやはり北風会という場合が多く、一般にもその名で知られていた。

これらの集まりのほかに、さらにも一つ、荒畑寒村、山川均を中心とする「労働組合研究会」が麹町有楽町の服部浜次方で開かれていた。荒畑も山川も後にはマルクス主義者になったが、当時はサンジカリストであり「経済的直接行動派」であり、その集まりは地の利をもえて出席者が多く、北風会員はもとより印刷工組合信友会、新聞工組合正進会の闘士も多数参加した。

かくて同八年七月、京橋区南桜河岸の川崎家で、各派社会主義者合同主催の「労働問題演説会」が開催された。この演説会は幸徳事件以来、最初の公開演説会であったが、官憲は両三名の入場とともにいきなり解散を命じたので、このべらボーに憤慨した大杉、荒畑、~~藤~~藤らが街頭演説を始め、警官との間に乱闘がおこり、主として北風会員十数名が検束され、留置場でも、もみにもんだ。これが北風会の運動に油をかけることになったのであるが、この意味において川崎家の演説会は記憶すべきものであった。

当時、日本の労働運動は社会情勢の波に乗って画時代的勃興をみ、労働組合は続々として発生し、労働問題の演説会は連日各所に開催された。しかしその多くは労働ブローカーの跳~~躍~~であり、御用学者の労資協調的ゴマ化し演説であった。

毎土曜日に集合して労働運動の闘士養成所の観を呈していた北風会は、それらのまやかし屋どもの演説会を片っぱしから打ちこわした。長い間、言論の自由をまったく奪われていたウツ憤がこれを機

会にほとと走ったのである。行動はさらに熱を生んで、この運動は実に目ざましいものがあつた。筆者もこの北風会の一員であつたが、今なお遠慮なく断言することができる、北風会のこの時期に際しての運動は、たしかに日本の労働運動を戦闘化し、労資協調への墮落を防ぐうえに一つの功績を残したものである。

話は少し前後するが、同大正八年二月、京都の山鹿泰治は『時の福音』（平民の鐘、ラ・エヴァンゲリオー・デ・ラ・ポーラ）、幸徳秋水が獄中より弁護士に宛てた書簡、『サンジカリズムおよび総同盟罷工』、クロボトキンの『パンの略取』の梗概などを秘密出版し、配布して捕えられ、翌年十月、禁錮二年に処せられたなどの事件もあつた。

『労働運動』の創刊

大正八年の労働運動勃興期にあたり、同年十月、月刊『労働運動』が創刊された。同人は大杉栄、和田久太郎、中村還一、~~近~~藤憲二、伊藤野枝、（のちに久板卯之助も加わつた）であり、山川均、荒畑寒村は外部からこれを援け、吉川守閤、服部浜次も経済的に援助した。『労働運動』は創刊号に次の如くその態度を表明している。

「日本の労働運動は今、その勃興初期の当然の結果として実に紛糾錯雑を極めている。頻々として簇出する各労働運動者および各労働運動団体の各々の運動の理論も實際も甚だ明確を欠き、従つてまた、その相互の間の理解も同情もほとんど全くない。局外者からみれば、日本の労働運動の現状は全くの一迷宮である。そして恐らくは、これはなお暫くの間の大勢であろう。

「労働者の反資本的感情が、混とんたる紛糾状態をえがきつつ、向う見ずに狂奔して行くのもおもしろい。その狂奔の間には、各々の力が自然に相衝突し相平均して、各自の進路が自然に明確になつて行くだろう。しかしまた、その間の各々の力が自己の進路や他の力との衝突や平均を確実に意識して行きたいという努力を起すのも、やはり自然のことであろう。

「僕らは今、この努力の促進を日本の労働運動そのものための僕らの主要な役目の一つだと考えている。本誌はすなわちその機関なのだ。日本のあらゆる方面における労働運動の理論と實際との忠実な紹介、およびその内容批評、これが本誌のほとんど全部だ。

「ただ僕らには僕ら独自の観察がある。そしてその観察の上からの紹介や批評には僕ら独自の多少の臭味が現われるのもまた自然のこととしてよぎないことであろう」

この臭味とは、すなわち無政府主義ないしアナルコ・サンジカリズムであつたのだ。この『労働運動』は、忠実な報道にもよつて、各労働団体の間に喜ばれた。

また和田久太郎は労働運動社関西支局を大阪市南区空堀町武田伝次郎（幸徳事件の武田九平の弟）方に設置し、南出張所逸見直造（逸見吉三の父）、名古屋支局の伊串英治、神戸支局の安谷寛一、京都支局の奥田芳郎、その他関西各地の同志と協力し、京阪神の各労働組合に働きかけて関西における運動の基礎を作つた。

そのころ労働者の間から知識階級排撃の声が起りはじめた。労働者の間からというよりむしろ、主として印刷工組合信友会および新聞工組合正進会の中からといった方が正確である。この知識階級排撃の運動は、当時の労働運動が次第にその思想を深め自主的運動たらしめた一つの現われであるか

ら、ここに一言しておくのも余計なことではあるまい。

労働運動の勃興につれて知識階級の人でこの運動に参加したものは少なくなかった。その中には単なる同情者にすぎないものもあったが、そのほか職業的労働運動者、資本的労働運動者、野心家的労働運動者などいろんなのがいた。それらにたいして自主的労働者が反感にもえたのはもちろんであるが、彼等はまた、理想家的労働運動者にたいしても好意をもたなかった。

理想家的労働運動者は、とかく労働者のまだ明確にもたない彼等自身の理想を強いたがる。その理想にしたがって労働者の運動を指導したがる。そしてこの理想家らはお互の間の少々の意見の相違から始終なにかやといがみ合い、吠え合っていて、そのけちくさい争いの種を労働者の間にまで移し植えようとする。この結果は当然に労働者の自主的運動を妨害するものである。

自主的労働者が知識階級を排撃したのは、こういう理由と実際からであった。したがって彼等の排撃したのは「知識」ではなくて「知識階級」であった。知識階級の出しやばりと自惚れであった。しかしながら当時の友愛会（のちの日本労働総同盟）の中には、これらの理想家的労働運動者や職業的、野心家的労働運動者がいたが、彼等は自主的労働者が知識そのものを排撃するものかの如く流布して、自己の地位の安全をはかることにつとめた。が、やがて友愛会の内部にも、自主的運動がおこり、会長鈴木文治の地位が危ぶまれたこともあった。

この自主的労働者はもとより経済的直接行動を主張して議会政策の偽瞞を暴露した。そしてこの議会政策反対の声はやがて当時の労働運動の主流となり、労働総同盟さえが、長い間かけていた普通選挙の一項をその綱領から削除したほどであった。「北風会」の会員、および雑誌『労働運動』は、

これらの自主的運動を声援しまたその先頭に立つて活動した。経済的直接行動——これこそは当時の自覚した労働者の合言葉だったのである。

『労働運動』は大杉栄の入獄などもあったが、ともかくも大正九年六月、第六号まで続き、印刷所の困難のために遂に廃刊せざるを得なかった。

印刷工組合「信友会」

前兩三回にわたり、印刷工組合「信友会」および新聞工組合「正進会」の名がしばしば出たが、この兩組合は後に自由連合主義組合運動の中心勢力として活動し、わがアナーキズム運動と深い関係にあるので、その大体を述べておかねばならぬ。

日本における印刷工の組合運動はかなり古いもので、いま信友会の歴史を述べようとすればその前身である「欧友会」から始めなければならず、欧友会もまたさかのぼって「誠友会」に関連があり、古くは活版工同志会、懇話会など明治二十二、三年の昔にまでその根源をたどらねばならぬのであるが、しかし労働者の自主的組合としてならば欧友会創立以後からでいいであろう。

欧文植字工組合「欧友会」は明治四十年（一九〇七）春、欧文工峰岸正太郎、吉川常二郎、野本正吉らの主唱で創立後一年を経過せぬうちに早くも東京欧文工のほとんど全部を網羅し、会員三百五十名を数えるに至った。水沼辰夫もすでにこのころから組合運動に加わったのである。

そしてその後、いろいろの径路を踏みながらも、ともかくも順調に団体的訓練を経つつあった欧友会も、大正三年（一九一四）第一次世界大戦の勃発とともに致命的打撃をうけた。すなわち横浜にお

けるドイツ系欧文紙の廃刊と発行禁止、在留外人帰国と商店の閉鎖、欧文印刷の閑散は、欧文会員にも二割近い失業者を出し、しぜん組合も不振を来して、大正四年十月、京橋川崎家における第九回大会はついに機関紙の発行停止を決議し、会務の執行も中止される状態にあった。

大正五年六月から、かねての懸案であった工場法が「骨ぬき」となつて施行されることになったが、工場主の中にはこれを利用して、多年勤続者や病気の職工を解雇するものがあつたので、これに憤起した有志は欧友会の復活を企て、十月一日有志茶話会を開いた。そして、もし欧友会の復活が可能ならば新しく団体を組織せんことを誓い、急拠欧友会大会を開くことに決した。

かくて十月三十一日、欧友会最後の大会は浅草の「あづま」に開かれたが、出席者わずかに五十名、されどこれがかえつて刺激となつて、ここに断乎欧友会の解散を決するとともに、その席をもつて直ちに欧文工組合「信友会」の創立協議会たらしめたのであつた。

五十名の創立委員はその後猛烈に組合の拡張運動に着手し、翌六年二月には在京欧文植字工の大半の参加を見るに至つた。

それと同時に、信友会をただに欧文植字工だけの組合だけではなく、印刷界の全産業員、すなわち和文工も機械工も、校正係も、製本工も、打つて一丸とした印刷全従業員の組合を組織することになり、たちまちにして約四百名の入会者を見、組合員六百五十名を超えたので、大正七年一月神田南明俱樂部に活版工組合「信友会」を開き、三月から機関紙『信友』を発行した。

その後組合員はさらに増加して一千名近くまでになったが、欧州戦乱による物価騰貴は頻々たるストライキとなり、八月米騒動勃発は信友会を一大暗礁に乗りあげさせた。荒畑寒村の書いた米騒動に

たいする檄文を水沼辰夫と近藤憲二が秘密に印刷して散布した等のこともあつたが、血迷える官憲は何等関係なき信友会員を数日間拘禁したり、出勤中の工場から引致していやがらせをやつたりしたので、恐怖と誤解とにより多数の脱会者を出して組合員は半減し、水沼辰夫、立田泰ら十数名は各工場へブラックリストをまわされる結果を招いた。

しかし大正八年に入りわが国労働運動の勃興とともに、信友会は猛烈な拡張運動を開始し、同年十月ごろには組合員千五百を数えるに至つた。

もっとも当時信友会は、水沼辰夫、高田公三、桑原練太郎、鈴木重次、阿部小一郎らいわゆる経済的運動派一本にまゝつていたわけではなく、原田正二、入沢吉次郎、野村孝太郎、平野重吉などの普選派もあつたが、いずれも純労働者であり、信友会は新聞工組合正進会とともに、労働者の独立自主の組合として労働組合の間に異彩を放つていたのである。

その後この信友会が正進会と相携えて自由連合主義組合運動を推進するまでには、さらに多くの同志の努力によるのであるが、ここには大正八年末ごろまでのことのみにとどめ、それ以後については後に譲ることにする。

新聞工組合「正進会」

印刷工組合「信友会」とともに自由連合主義組合運動の先頭をきつた新聞従業員組合「正進会」について述べるとなると、まずその前身である「革進会」からはじめなければならぬ。

革進会は、わが労働運動の躍進的発展期であつた大正八年（一九一九）に、東京の新聞印刷工を糾

合して組織されたもので、同年五月の創立であり、会長には時の憲政会の代議士横山勝太郎をすえ、機関誌『革進』を発刊した。

そして創立もない七月、革進会は八時間労働制の実施および最低賃金制の制定を要求して起ち、同月三十一日から向う五日間、東京市内に一枚の新聞を見ず、日本の首都二百万人の耳目をほとんど完全にふさいだという結果を招来せしめたのである。

この新聞休刊事件につき各新聞社の発表によると、職工側の連合同盟罷業の結果、新聞協会は止むなく同盟休刊に決したといっているが、事実は必ずしも左様に消極的ではなく、東京十六新聞社は秘密契約を結んで堅く同盟し、職工側のストライキにたいし強く逆襲し、威嚇のため工場閉鎖の拳に出て、疾風迅雷的に同盟解雇を断行したというのが真実であった。

この間にあって会長横山勝太郎は労働運動のなんたるかを解せず、臨時大会を開いて罷業応援の決議を伝達にきた信友会代表の入場を拒絶し友愛会の援助をも断って、みずから孤立無援となり、しかも新聞社と警視庁の恫喝と懐柔にあつて軟化し、一部の罷工者から除名の決議をされたほどであった。かくて罷工団は名士会長を排した自主運動に移ろうとしたが、時すでにおそく、戦いは零敗に決し、革進会それ自身も壊滅するに至った。

かくて革進会は解散したがその後いくばくもなく各社の有志は組合再建に着手し、同大正八年十二月九日、京橋川崎家において「正進会」の成立を見、翌九年四月から機関紙『正進』を発刊したのである。

正進会は前回失敗の経験により強く労働者の自主的運動を高唱し、発会当初から印刷工組合信友会

をはじめ、各労働団体と提携するだけでなく、ひろく「社会主義者」とも提携合流している。

かくて正進会の多くの闘士がアナキズム運動に参加しその運動を盛りあげてゆくのであるが、それらの人たちの名をあげると、布留川桂、諏訪与三郎、綿引邦農夫、和田栄太郎、渡辺幸平、白石朝太郎、木全増太郎、布留川信、白銀東太郎、北村栄以智、山田幸次、山田幸雄、小林進二郎、北浦千太郎、生島繁、伏下六郎、その他多くの人があつた。この人たちについては追つてまた述べなければならぬ。京橋新佃田西町の布留川方は、組合の事務所であり、闘士養成所でもあつた。

大正九年八月、革進会同盟罷工一周年が来ると、正進会は惨敗記念演説会を開催するとともに、各新聞経営者にたいし、昨年の公約による八時間二部制および最低賃金制の実施を申出で、再び運動を開始した。この交渉は九月に入りいよいよ本式に白熱化するのであるが、両者がたがいによらず相対峙していたところ、同二十六日、突如として報知新聞社に空前の事件が勃発した。すなわち布留川桂、北浦千太郎、生島繁、伏下六郎によって工場の活字台が大半ぶつ倒されたのである。

当時報知新聞社から日比谷署に出した届書によると、活字ケース台五十四組を顛ぶくして使用不能に陥らしめ、その他損害合計八万八千三百円と書いてある。この事件によつて布留川らは懲役四カ月に処せられた。

報知新聞に続いて、万朝報、時事新報、朝日新報、やまと新聞、読売新聞、東京毎日新聞も動揺したが、万朝が成功しただけで、他は再び惨敗し多くの鹹首者を出したのである。

なお正進会についてはあとで書くべきことが多いのであるが今回は大正九年までのことに止める。ただ当時すでに信友会、正進会の有志によつてSS会が組織されていたことを記しておかねばなら

ぬ。SS会とは両組合の頭文字をとった命名で、後に自由連合運動に有力な動きをするのである。

日本最初のメーデー

メーデーを日本にはじめて紹介したのは酒井雄三郎であり、彼がヨーロッパから雑誌『国民之友』に寄稿した「五月一日の社会党運動会に就て」(明治二十三年七月号掲載)「五月一日および総挙同盟罷工」(明治二十四年六月および七月号掲載)が最初である。

そして社会主義者の間ではふるく平民社時代からメーデーの集まりがあったが、それは屋内の小集に過ぎず、労働団体による大衆メーデーが日本で最初に行われたのは大正九年(一九二〇)であった。当時、一般にはメーデーについてはほとんど全く知られていなかったのであるが、同年に入ってから印刷組合「信友会」、新聞工組合「正進会」の有志の間に、今年こそ日本でもメーデーを挙行したいとの声が起ってきた。そしてその主唱者の一人である水沼辰夫らの奔走で、信友会から友愛会(後の労働総同盟)その他の労働団体に呼びかけ、神田の松本亭でメーデー準備会の開催をみるのであるが、そのかぎりには社会主義者の支援もあり、準備会の費用には、堺利彦に保管されて社会運動へ何か有意義な使い道を探していた幸徳伝次郎著『基督抹殺論』の印税があてられている。春秋の筆法を以てすれば、死したる幸徳、メーデーに労働大衆を動かすということになるのである。

かくて日本最初のメーデーは、友愛会、信友会、正進会、大進会(博文館の印刷工組合)、啓明会(教員組合)、小石川労働会(砲兵工廠)、自由労働者組合、工人会(海軍工廠)、日本労働組合、汎労会、日本機械工組合、全国坑夫組合、工友会、鉱山労働同盟会、交通労働組合の十五組合および社

会主義団体が参加して、五月二日上野公園で行われた。(日曜日の二日に繰り下げ行われたのである)参加人員五千、わが労働運動社も黒旗をひるがえて加わり、メーデーの歴史を記し労働者に訴えた『労働運動』の号外が北風会員によって撒布され、会場の氣勢をおおった。

第一回メーデーの司会者は友愛会の鈴木文治であったが、お膳立ては信友会、正進会によってなされたのである。

また、この第一回メーデーが機縁となって、関東における労働組合の共同戦線が形づくられることとなった。五月八日、友愛会本部で行われたメーデー会計報告会の席上、各労働組合の永続的な連合機関をつくることにつき協議され、同十六日、労働組合同盟会の結成を見た。加盟組合は最初、交通労働組合、信友会、正進会、大進会、友愛会、啓明会、工友会、汎労会、工人会であった。

これに続いて、関西の労働組合の間にも共同戦線の気運がおこり、同年十月、友愛会大阪連合会、大阪印刷革新同志会、大阪洋服裁縫組合同志会、大阪刷子工組合、向上会、関西鉄工組合、電業員組合、大阪仲仕人夫労働組合、その他によって関西労働組合連合会が組織された。労働運動共同戦線の機運は、メーデーを契機としてみなぎり来ったのである。

なお、日本社会主義同盟のことは次節に譲ることにするが、やはりこの大正九年にあったことの二、三につき記しておく。

まず文化運動として、芸術的革命運動を標ぼうする黒耀会の創立である。同会は望月桂らによってつくられたもので、その第一回作品展覧会は同年四月牛込築土八幡前で開催され、林俊衛、望月桂の本職画家をはじめ、堺利彦、大杉栄、荒畑寒村、馬場孤蝶、大庭柯公、生田春月、その他多数の社会

主義者が出品し、第二回は同じ年の十一月、京橋の星製菓本社内で開かれ、出品者六十余名、出品総点数二百五十余点、大いに反逆的氣勢を挙げた。

また十月三十日には、幸徳事件以来ヨーロッパに亡命していた石川三四郎が八月ぶりで日本に帰った。彼はその滞欧の大部分を、無政府主義の先覚エリゼ・ルクリュエ家の一族と生活をともにしてきたのである。

さらにこの年つくられた団体として大阪の黒旗会がある。これは労働運動社関西支局の和田久太郎がつくったもので、関西における黒色運動の先駆をなすものである。

また東京では加藤一夫らの自由人連盟が結成され、機関誌『自由人』を発刊した。

日本社会主義同盟

樽井藤吉を首唱者とする東洋社会党ができたのは明治十五年（一八八二）であり、安部磯雄、幸徳伝次郎らの社会主義研究会が生れたのは明治三十一年であって、日本の社会主義運動はかなりながい歴史をもっているのであるが、政府の露骨な圧迫によって、外部への成長は殆んど全く阻止されていた。そして特に幸徳事件以後は社会主義の運動はただ僅かの「同志」の間に固定し、外にたいする同化力はなくなってしまったのではないかと疑わせるほどの状態であった。

これには、いろんな原因が数えられるであろうが、無産者階級の階級意識が成熟していなかったことが、日本の社会主義運動を固定し沈滞させていた最も大きな原因であろう。

しかし大正八年、九年の労働運動の飛躍的發展はこの形勢を一変し、社会主義は民衆のものとなつ

てきた。日本社会主義同盟はかような形勢を反映して生まれたものである。

もつとも、同盟をそもそも発起したのはふるい社会主義者であり、その下準備のためには山崎今朝弥、山川均、服部浜次、吉川守圀、岩佐作太郎、橋浦時雄、近藤憲二らが最も尽力したが、大正九年九月には各方面からの顔ぶれをそろえることができ、創立発起人会を開く段取りにまで進んだ。発起人は次の三十名であった。

赤松克麿（新人会）、荒畑勝三（労働組合研究会）、麻生久（友愛会）、布留川桂（正進会）、橋浦時雄（北郊自主会）、服部浜次、岩佐作太郎（北風会）、加藤一夫（自由人連盟）、加藤勘十（鉦夫総同盟）、京谷周一（鉦夫総同盟）、近藤憲二（北風会）、水沼辰夫（信友会）、前川二享（交通労働組合）、延島英一（北風会）、大庭柯公（著作家組合）、小川未明（著作家組合）、岡千代彦、大杉栄（北風会）、堺利彦、島中雄三（文化学会）、高畠素之（国家社会主義）、高津正道（曉民会）、田村太秀（扶信会）、植田好太郎、和田巖（建設者同盟）、渡辺満三（時計工組合）、山川均（労働組合研究会）、山崎今朝弥、吉田只次（横浜）、吉川守圀（北風会）

かように同盟創立発起人には、ふるい社会主義者のほかに各方面の人を網羅していた。友愛会、信友会、正進会、交通労働組合、日本時計工組合、鉦夫総同盟などの労働組合員。建設者同盟（早大）、新人会（帝大）、扶信会（法大）などの学生団体。労働組合研究会、北風会、東京北郊自主会、著作家組合、文化学会、曉民会などの思想団体。かくのごとく各方面の人をふくんでいたと同時に、いろんな色彩を取りまぜていた。無政府主義者、サンジカリスト、共產主義者、国家社会主義者、それに民主主義者といった方が妥当であるような人も加わっていたが、ともかくも、ひろい意味での社会主

義者の大同団結だったのである。

大正九年、同盟事務所を芝新桜田町の山崎今朝弥方から麹町元園町におき、機関誌月刊『社会主聞』も発行した。政府は同盟が日を追うて膨脹するのを黙視してはいず、常にあらゆる方法手段で圧迫したが、しばしば各地に演説会を開催して同盟の拡大につとめ、十一月には加盟者一千名に達したので、十二月十日、創立大会を開いた。

神田青年会館での創立大会は官憲に妨害されて開会と同時に解散、多数の検束者を出し、その検束者が警視庁の留置部屋で器物を破壊したというので、結局、大串孝之助、宮越信一郎、雑賀習之、渡辺善寿、板橋万吉、田所輝明ら十三名が処刑される等のこともあったが、ともかくも同盟は成立した。

そして、その後、京阪神、中部地方、四国、その他の地方に盛んに宣伝演説会を行ったが、翌十年五月の第二回大会後まもなく、同盟そのものが遂に禁止解散を命ぜられるに至ったのである。機関誌『社会主義』は、形式的には同盟から独立したものととして、同盟解散後も継続されていたが、同年九月号をもって廃刊した。

日本社会主義同盟は政府の手によって打ちこわされたのであり、事実そうに違いないが、しかし一方、当時の同盟は内部的に各派の思想的色彩が漸次その度を加え、早晚内部的崩壊を来す傾向を存していたのである。すなわち、一つには友愛会の内部におこった「組合運動に帰れ」の運動であり、これにたいする急進的労働組合員の不満である。また一つには無政府主義者と共産主義者の対立である。これらのものが同盟の内部に反映されつつあったのであるから、したがって同盟の解散命令にたいしても存外冷淡で、大した執着をもたなかった。約言すれば、社会主義同盟は内部的崩壊を見よう

としたときに、政府から解散を命ぜられたのである。

共産主義との協同戦線時代

ロシア革命がおきたのは一九一七年であるから、それから三年目の一九二〇年（大正九）日本社会主義同盟の創立準備がはじまって間もない八月、朝鮮の同志がひそかに連絡にきて、十月、上海で極東社会主義者会議を開催するから、日本からも参加するようすすめた。

この連絡は最初、当時すでに共産主義の色彩を明らかにしかけていた堺利彦、山川均^{（金）}、来たが、二人がことわったので、その話が杉大にまわったのである。かねて中国の同志との連絡を開きたい希望をもっていた杉大は、好機逸すべからずとして、約束の十月、上海へ潜行した。上海の会合は、中国、朝鮮、日本、ロシアの集まりであったが、実はロシアの主催であり、極東赤化の拠点をつくらんがためのものであった。そこで杉大は、その申し出を断り、ただ情報交換の委員会をつくるだけのことにして帰った。結果はそれだけであったが、この杉大の上海行きが、日本の社会主義運動を国際化する糸口となったのである。

杉大は、帰ると直ちに『労働運動』の復刊を計画し、大正十年一月から週刊で発行した。同人は第一期『労働運動』のときの和田久太郎、近藤憲二、中村還一、久板卯之助のほか竹内一郎、寺田鼎、それに共産主義者の伊井敬（本名近藤栄蔵）、高津正道、九津見房子を加えたものであった。

週刊第一号の巻頭には「日本の運命」と題し、次のように書いている。

「日本は今、シベリアから朝鮮から中国から刻々分裂を迫られている。僕等はもうぼんやりしてい

ることはできない。いつでも起つ準備がなければならぬ。週刊労働運動はこの準備のために生れる」
当時は、ヨーロッパ・ロシアの最後の反革命軍ウランゲルは没落し、シベリアの反革命軍セミヨノフも没落して、ロシア革命もだいたい安定したときであり、中国においては広東政府の発達が新中国への動きを見せており、国内における労働運動の飛躍的發展と相まって日本の進歩的民衆は、新しい希望にきおい立っていたときである。週刊『労働運動』はこの情勢を反映してはじめられたのである。

紙上には、伊井敬の「ボルシェヴィズム研究」が載せられているかと思うと、「労働政府を倒せ」という論文も書かれている。そういう点においても、当時だんだんと明瞭になりかけた無政府主義と共産主義との二つの流れを反映し、しだいにその度を加えて行っている。しかし大勢は日本社会主義同盟がそうであったように、労働運動社もアナ・ボル協同の時代だったのであるが、社会主義同盟が解散を命ぜられて後、大杉の使で上海へ連絡にいった近藤栄蔵が、帰りに下関でつかまったところから、共産主義者との溝がいよいよ深まってきたので、近藤憲二が第二回メーデーのことで入獄したのを機会に『労働運動』は廃刊した。（週刊といっても、月二回くらいしか出ていなかったのである）

もっとも、この『労働運動』でのアナ・ボル協同戦線にたいしては、共産主義者の間にもこれを冷笑しているものがあつたごとく、無政府主義者の間にもこれを不満としたものがあつた。村木源次郎、宮嶋資夫らがそうであり、吉田一、高尾平兵衛らの月刊『労働者』の同人もそうであつた。『労働者』は大正十年四月に創刊され、四号までつづいた。

日本社会主義同盟の解散、週刊『労働運動』の廃刊によって、共産主義者との協同戦線は破れたが、無政府主義者はロシアの民衆運動にたいする希望を捨てたのではなかった。ロシアの民衆が共産

党に禍いされることなく、ほんとうの労働解放を成しとげるであらうことを希望し、かつ信じていた。それだからこそ、一九二一年（大正十）十二月モスコで開催された極東民族大会にも、当時の無政府主義陣営からの出席者は共産主義者よりもはるかに多く、第一回には、吉田一、和田軌一郎（以上労働社同人）、北村栄以智、小林進二郎（以上新聞工組合正進会）、つづいて高尾平兵衛（労働社同人）、渡辺幸平、白銀東太郎、北浦千太郎、秀島広二（以上正進会）、水沼熊（鉄工、水沼辰夫の弟）らがロシア入りをしている。もっとも大会出席よりもロシアの真相を見るのが目的だったのであるが、同大会へ危険をおかして参加した日本の労働者の殆んどが、無政府主義者ないしアナルコ・サンジカリストだったのである。

無政府主義者はかくロシアとの連絡を開くうえにも決して冷淡ではなかった。いや無政府主義者が最もこのために努力したのである。そしてロシア共産党が独裁専制を逞ましくし、労働者農民をその膝下におさえつけるのを見るにいたって、はじめて排撃の叫びをあげたのである。真の労働者解放のために。

かくて日本の社会主義運動は、当然わかれなければならぬ二つの流れを見るにいたり、この二つの流れが相戦いつつ、おのおのの進路に向つて突進することになったのである。

ボルシェヴィキに対する宣戦

大正十年五月に日本社会主義同盟が解散を命ぜられ、つづいて同六月、週刊『労働運動』が廃刊されて、アナ・ボル協同戦線に終止符がうたれるとともに、当然わかれねばならぬ二つの流れが、各々

の進路にむかって突進することになったことは前に述べた。

共産主義側では、それからまもなく近藤栄蔵、高津正道、仲宗根源和らが秘密結社「曉民共産党」を組織し、さらに山川均、田所輝明、上田茂樹らは月刊雑誌『前衛』および「水曜会パンフレット」を発行して共産主義の宣伝につとめ、これにたいして無政府主義側では同年十二月から、大杉栄、和田久太郎、近藤憲二、伊藤野枝らが三度目の『労働運動』を発刊し、甲府の矢崎源之助、小沢景勝、高田良幻らは『革人』をはじめ、早稲田大学の学生団体建設者同盟員であった古田大次郎、長島新らは埼玉県下で小作人社を創設して農民運動を開始し、信友会、正進会の闘士は労働組合同盟会の同志とともに自由連合主義による労働運動を強力に展開するに至った。

前にもいったが、無政府主義者は最初からロシア革命に反対したのではない。ロシア革命は資本主義制度を顛覆した最初の社会革命である。世界の労働者はそれによって勇気を鼓舞され、思想や行動のうえにも大きな影響を与えられた。これは動かすことのできぬ事実である。したがって、無政府主義者もまた大なる希望をもってこれを迎え、協力をおしまなかったのである。しかるに、その後ボルシェヴィキ革命の進行は「革命はどんな風にやっばいけなやか」を示すに至った。無産階級の独裁という、いかにも労働者農民のよろこびそうな言葉のもとに極力中央集権の地固めをし「鉄の規律」のもとに民衆をおさえつけるのを見るに至って、真の革命のために断乎これを攻撃したのである。

無政府主義の立場からボルシェヴィキの暴政を最初に暴露し、これを各国の無政府主義者およびサンジカリストの新聞雑誌に書き送ったのは、革命の進行中ロシアにあつてみずからそれを見てきたアレキサンダー・ベルクマン、エマ・ゴールドマン、アレキサンダー・シャピロなどであり、『労働

運動』にもそれらの記事が掲載された。

『労働運動』はなお、「ソヴィエト政府と無政府主義」「ロシア政府と農民」「労働ロシアの労働事情」など、ロシアの内情を報道してわが労働者農民に訴え、共産党にたいしはげしい論陣を布くとともに、バクーニン、クロポトキンなどの思想をも紹介し、真向うから無政府主義の宣伝を開始したのであった。

当時、大杉栄は、「何故進行中の革命を擁護しないのか」という質問に答えた一文の最後に、次のごとくいつている。

「ボルシェヴィキ政府にたいする批判？ 僕はそれをずいぶんながい間遠慮していた。僕ばかりではない。世界の無政府主義者の大半はそうだった。また革命の最初にはみずから進んで共産主義者らと協同の戦線に立ったものも少なくなかった。ロシアの無政府主義者らはほとんど皆なそうだったといつてもよからう。ロシア以外の国での無政府主義者は、一つにはロシアでの真相がよくわからなかった。

そしてもう一つには、実際反革命がいやだった。そして彼等は十分の同情をもってロシア革命の進行を見ていたのだ。が、真相がだんだん知れてきた。労働政府すなわち労働者と農民との政府それ自身が、革命の進行を妨げる最も有力な反革命的要素であることすらがわかった。ロシア革命は誰でも助ける。が、そんなボルシェヴィキ政府を誰が助けるのか」

なお大正十一年七月には、アメリカ生まれのロシア人で神戸で『クロニクル』の記者をしていた無政府主義者イワン・コズロフが退去命令によって上海に去った。退去を命ぜられた理由は、新聞記事

取材のため神戸の川崎造船所争議に接近したこと、日本の無政府主義者と往復したことくらいのものであった。彼には英文の『日本における社会主義運動と労働運動』の著がある。

また同年九月には、中国の同志陳春培が国外に追放された。彼は楊敬慈その他の留学生同志とともに無政府主義結社「光社」（のち未来社、無名社と改称）をつくっていたことを官憲にかぎつけられたからであった。

陳春培は中国に帰った後、雲南から「中国の無政府主義運動」なる一文を『労働運動』によせたことがあるが、彼はその最後に「中国に帰って考えてみると、よくもあんな七面倒な国に窒息もしないで暮してきたと思うよ」と書いてあった。

全国労働組合総連合の計画

第一回メーデーに促されて組織された東京の労働組合同盟会は、翌年の第二回メーデーのち友愛会が脱退したが、当時の財界不況による資本家階級の強い攻撃にたいする対抗から、大正十一年（一九二二）の第三回メーデー直後再び労働組合の間に全国的な共同戦線体を結成しようという気運がもたらされた。

すなわち、東京においては五月七日、月島労働会館にメーデーの会計報告会が開かれた席上、教員組合啓明会の下中弥三郎から「全国労働組合総連合」の計画を進めることの提案があり、出席各組合とも満場一致で、誠意をもってこの計画に協力しようと申合せた。これと前後して労働総同盟の関西同盟にも同様の決議があり、「総連合」は労働組合の問題となり、希望になってきたのである。

これよりさき、労働組合同盟会側では、全国的総連合の前提として、職業別、産業別の地方的連合を組織する必要があると感じ、その促進に努めていたのであったが、同年六月、純労働者組合、機械技工組合、日本労技会、本芝労働組合、海軍工人会、陸軍現業員組合の六組合が「機械労働組合連合会」を組織して一勢力を加え、芝浦労働組合は加盟はしなかったが、しだいに自由連合派と相接近しつつあった。

また関西においても、大阪鉄工組合、立憲造船労働組合、美術友染工組合、京都印友会、日本機械労働組合、大阪皮革工組合、関西自由労働者組合などで「組合同盟会」をつくった。反総同盟派と自由連合派との連合体であった。

かくてこれらの各労働組合が、関東も関西も、自由連合派も総同盟派も、相携えて総連合結成の運動を推進することになったのである。

組合同盟側と総同盟側はしばしば協同打合せ会を開いて折衝をつづけ、九月十日、東京神田の松本亭で関東関西各派代表者の準備委員会を開いて規約草案作成につき協議したが、総同盟はこの席において、「種々異なる傾向の組合を包容するのであるから、初めのうちは東京の組合同盟会のような組織で進めよう」という最初の言明を忘れたかのごとく、強力なる中央集権主義（合同主義）を主張し、総同盟によって全国の労働組合にたいする指導権を確立しようとする野望を露骨に示すにいたった。（この態度は中間的労働組合をも刺激し、反総同盟的感情を高からしめる結果ともなった）これにたいし組合同盟側は自由連合主義を主張して譲らず、総連合組織の前途はなほだ困難を感じしめるものがあつた。